【国際芥川龍之介学会ISAS　第4回研究集会のご案内】

国際芥川龍之介学会 ISAS　第４回研究集会を、県立神奈川近代文学館、(公財)神奈川文学振興会との共催で開催いたします。

開催形式は**会場での「対面」で行います**が、オンライン会議システム **Zoom** による中継も予定しています。ただし、ネット環境の状況によりオンラインでの配信が不安定になる恐れのあることをご了解願います。

なお、**参加者には原則として事前の登録をお願いいたします**。

記

日　　時 ： **2023 年 3 月 5 日**（日）**午後 1 時 30 分 ～ 午後 4 時 30 分**（予定）

会　　場 ： **神奈川近代文学館　ホール**

※神奈川県横浜市中区山手町 110

地下鉄みなとみらい線「元町・中華街駅」下車／６番出口・徒歩 10 分

JR 京浜東北線（根岸線）「石川町駅」下車／元町側出口・徒歩 20 分

https://www.kanabun.or.jp/

登 壇 者 : ◇研究発表

落合修平氏（障碍者福祉施設職員）／午後１時40分～２時50分（予定）

価値喪失と追憶　保吉物をめぐって

◇研究集会運営委員会企画「研究を聞く」

石割透氏（駒沢大学名誉教授）／午後３時～４時30分（予定）

芥川龍之介あれこれ

開催方法 ： **対面**

※オンライン会議システム　Zoom での配信も予定しています。

配付資料 ： 開催日の前日までに PDF ファイルにて配付する予定です。配付方法は、参加登録をされた方にお知らせします。

なお、対面での参加者には印刷した資料を会場で配付します。

事前登録 ： **対面、オンラインでの参加者ともに、事前登録を行ってください。**

※登録の方法は、学会ホームページにてお知らせします。

※対面での参加者は、当日、会場でも受け付けますが、準備の都合から、できる限り事前に登録してくださるようお願いを申し上げます。

文学館ツアー：午前 10 時30分より、神奈川近代文学館のご協力により実施します。

※バックヤードツアーと開催中の「文学の森へ　神奈川と作家たち展　第２部　芥川龍之介から中島敦まで　　コーナー展示：夏目漱石特別コレクションから　―漱石あて絵はがきを中心に」の観覧。

※事前申込制。定員10名（先着順）。

そ の 他 ：・「**出張依頼状**」が必要な方は、研究集会運営員会までお知らせください。

・**昼食**は、文学館の付近には飲食店が少ないため、各自でのご用意をお勧めし

ます。食事をされる方には、飲食会場として中会議室が用意されています。

・施設内では、**マスクの着用**をお願いいたします。

・開催中の展覧会につきましては、研究集会開催の当日、学会員に限り、入場料が免除されます。展覧会会場の受付で申し出てください。

・会場内での **Wi-Fi 環境**が不安定です。必要とされる方は、各自でのご用意をお勧めします。

問合せ： akutagawakenkyushukai ★ gmail.com

※研究集会運営委員会宛専用メールアドレスです。★を＠に替えてください。

※学会事務局宛のものとは異なりますのでご注意願います。

【発表要旨／研究発表】

落合修平氏**「価値喪失と追憶　保吉物をめぐって」**

「保吉の手帳」（『改造』一九二三・五）以降、作家自身をモデルとする堀川保吉の登場するいわゆる「保吉物」が続々とものされ、それと踵を接するように、王朝物、切支丹物、開化期物といった作品系列が断たれていることは周知の通りである。先行研究がそれを重要な転機と見做しつつ、しかし作品群の評価は総じて低く、あるいは論及すらされぬ傾向にあることも知られていよう。

本発表では、かような現状に鑑み、本来なされるべき個別作品の精読はしばらく措き、保吉物の総体的な志向性を捉えることを試みる。それらの作品群は、いかなる地点から発せられ、また何を求めるものであったのか――、「価値喪失と追憶」との視点から、作者の芸術的意図を把捉することで「保吉物」評価を新たにすることが目指される。

作家身辺を扱う保吉物は、久保田芳太郎が早くに指摘したように最晩年の「「話」らしい話のない小説」の主張に繋がる反ロマン的傾向を示している。そこには、以前までの彼の作品の備えていた整い過ぎるほどの「小説の体裁」を放擲するごとき姿勢が示され、「物語にならない物語」（石川巧）を描く反恋愛小説があり、随筆との境界も曖昧となる。とすれば、ここにあるのは既存の規範の解体であり、価値喪失の状況ではないか。

われわれは恐らく、価値喪失の只中にあってこそ、価値というものを精緻に、また切実に見出すことができる。そこで切り開かれて行ったのが、最晩年にまで引き続く「追憶」という方法なのではなかったか。「切実な情感がこゝには流しこまれてゐない」（吉田精一）と評された保吉物のうちに、些細なるものの価値を発見する切実な営みを捉えることを、僅かながら試みていきたい。

以　上